

第4章 助動詞

■助動詞

(01) can

can の中核的意味は《行為や状況の実現可能》である。

① can は先天的・後天的に備えている能力を表す。「～できる」

01. **My father can speak Korean and Chinese.** (父は韓国語と中国語を話せる。)

02. **Cats can see in the dark.** (猫は暗がりでもものが見える。)

03. **My sister can swim fast.** (妹は速く泳ぐことができる。)

② can は周囲の状況が許す行動の自由を表す。「～できる」

04. **You can speak Japanese in this class.** (この授業では日本語を喋ってもいいですよ。)

05. **We can see Taiwan island from here in fine days.** (晴れた日にはここから台湾島が見える。)

06. **We can swim even in November in Okinawa .** (沖縄は11月でも泳げる。)

Dr. Higgins's room

can は「許可」を表すが、「許可」も「周囲の状況から考えての行動の自由」の一つと考えられる。

③ can は生物や無生物の出来事の可能性を表す。「～しうる」「～でありうる」

07. **Playground equipment can kill or injure children.** (遊具で子どもが死傷することがありうる。)

08. **It can get cold even in Okinawa in January.** (1月には沖縄でも寒くなることもある。)

09. **Habu bites can be very dangerous.** (ハブに咬まれると、とても危険なことがある。)

④ can は疑問文で〈可能性〉に対する強い疑いを表す。「一体～だろうか」また、否定文で〈不可能〉であることの強い確信を表す。「～のはずがない」

10. **Can the news be true?** (そのニュースは本当なのかしら。)

11. **The news can't be true.** (そのニュースは本当であるはずがない。)

Dr. Higgins's room

助動詞は二つ連続して使えないから、未来の可能は will can ではなく、will be able to~ の形にする。

You will be able to swim in two weeks. (二週間で泳げるようになるでしょう。)

(02) could

could は can の過去時制形式であるので、もちろん can の過去形としての用法もあるが、could の主な用法は、①仮定法の could の用法と②許可の丁寧用法、③依頼の丁寧用法である。

① 仮定法の could 用法 「もしかしたら～できるかもしれない」

12. **I could eat a horse.** (馬一頭食べるかもしれない (ほど腹ペコだ。))

13. **I could see him at the party.** (ひょっとしたらパーティで彼に会えるかもしれない。)

② could は can よりも丁寧な許可を表す

14. **Could I ask you a question? — Of course you can.**

(質問を一つしてもいいでしょうか。—もちろん、どうぞ。)

15. **Could I have another cup of coffee, please?** (コーヒーをもう一杯いただけますか。)

16. **Could my son use your car? — Of course he can.** (息子が車を使っていいですか。—もちろん。)

③ could は can よりも丁寧な依頼を表す

17. **Could you show me the way to the station.** (駅へ行く道を教えてくださいませんか。)

18. **Couldn't you come to see me tomorrow?** (明日会いに来て下さいませんか。)

Dr. Higgins's room

過去を意味する could は、自分がそうしたいと思ったならいつでもそうできる状況にあった場合には使えるが、ある特定の場にある行為ができた場合には使えない。そういう場合には was / were able to ~を用いる。例えば、「一生懸命に走ったので、バスに間にあった。」は次のようになる。

I ran hard, so I was able to catch the bus. (○)

I ran hard, so I could catch the bus. (×)

しかし否定文になると、どちらにしてもその行為は達成されなかったもので、どちらの表現も用いることができる。

I ran hard, but I wasn't able to catch the bus. (○)

I ran hard, but I could't catch the bus. (○)

(03) may

may の中核的意味は《行為や認識の妨害がない》である。

① may は話し手の判断による許可を表す。「～してもよい」

01. **You may stay here.** ((私が許すから) あなたはここにいてもいいですよ。)

02. **You may go home.** ((私が許すから) 家に帰っていいよ。)

03. **Your brother may use my car.** ((私が許すから) 君の弟は私の車を使ってもいいよ。)

② may は法律・規則・道義上許されている内容を表す。「～してもよい」

04. **You may speak in Japanese in this class.** (この授業では日本語で喋ってもいいですよ。)

05. **Students may go to school by bike.** (生徒達は自転車で通学してもよい。)

③ may は May I~? で「～してもよいですか」と許可を求める。

06. **May I come in?** (入ってもいいですか?)

07. **May I turn out the lights?** (明かりを消してもいいでしょうか?)

Yes, of course you may. (はい、もちろんいいですよ。)

No, I'm afraid you may not. (いいえ、申し訳ないが、だめです。)

08. **May we go out?** (私達は外へ行ってもいいですか?)

Dr. Higgins's room

話し手が聞き手に〈許可〉を求める場合、聞き手は許可を与えるに足る権限を持っているわけである。だから、May I~? という許可を求める疑問文に対して、Yes, you may. / No, you may not. と答えるのは、「親が子供に」、「教師が生徒に」のような場合ならおかしくないが、対等の関係では使用は避けるべきである。そういう場合は、Of course you can. / Yes, of course. / I'm sorry, you can't. のように答えるのが良い。

④ may は現在または未来における可能性を表す。「～かもしれない」

09. **John may come, or may not.** (ジョンは来るかもしれないし来ないかもしれない。)

10. **It may rain tomorrow.** (明日は雨が降るかもしれない。)

11. **You may be right.** (あなたの言う通りかもしれない。)

12. **The plane for Naha may be late.** (那覇行きの飛行機は遅れるかもしれない。)

Dr. Higgins's room

〈可能性〉を表す may には may を文頭に置く疑問文はほとんど使われない。〈可能性〉を疑問形で表す場合は、(a) Do you think...? (b) be+likely...? の形が用いられる。例えば、上の 12. の例文なら、次のようになる。

(a) **Do you think the plane for Naha will be late?** (那覇行きの飛行機は遅れますかね。)

(b) **Is it likely that the plane for Naha will be late?** (那覇行きの飛行機は遅れそうですか。)

⑤ may は学術論文などで、典型的に起こる「可能性」を表す。「～かもしれない」

13. **ANP may prevent the spread of cancer.** (ANP は癌の転移を防ぐ可能性がある。)

14. **The affected area may be enlarged.** (患部は肥大する可能性がある。)

Dr. Higgins's room

〈可能性〉を表す may はよく‘may ~ but...’の形で、「～という事実は認めるが、しかし…」という意味を表すときに用いられる。しかし、この形で用いられる may はもはや〈可能性〉を表しているのではなく、事実を表していることに注意しなければならない。

(a) **My daughter may only be six, but she has a mind of her own.**

(私の娘はほんの6歳にすぎないかもしれないが、自分の考えを持っている。)

(b) **These pants may be nice, but they are too large for me.**

(このズボンはいいかもしれないが、私には大きすぎる。)

Dr. Higgins's room

〈可能性〉は can と may の両方で表すことができるが、can は主語が持つ力としての、理論的・経験的に考えられる〈一般的な可能性〉を表すのに対し、may は話し手がそういうことが起こるかもしれないと判断を下している〈現実的な可能性〉を表す。例えば、次の2文を比べるとき、(a) は一般的な可能性を言っているだけであるのに対し、(b) はこのままでは命を失う危険性があると話し手は判断を下している。

(a) **This illness can be fatal.** (この病気は (一般的に) 死に至ることがありうる。)

(b) **This illness may be fatal.** (この病気は (今の状態では私の所見では) 死んでしまうかもしれない。)

Leech (2004³:§121)

⑥ may は祈願を表す。「～でありますように」

15. **Good luck! May you be very happy!** (お元気で、お幸せに。)

16. **May God be with you!** (あなたに神のご加護がありますように。=さようなら。)

17. **May she rest in peace!** (ご冥福をお祈りします。)

18. **Long may you live!** (ご長寿をお祈りします。)

Dr. Higgins's room

〈祈願〉を表す may の用法では、‘May+主語+動詞の原形...!’ の形で用いられ、形式ばった表現であり、決まりきった文句で用いられる。

(04) might

might は may の過去時制形式であるので、もちろん may の過去形（時制の一致用法）としての用法もあるが、might の主な用法は、①仮定法の might の用法と②許可の丁寧用法、③弱い可能性の用法である。

① 仮定法の might 用法「(もし…なら) ~かもしれない」

19. He might finish the work if we helped him.

(もし私達が彼を手伝ってあげれば、その仕事を終わられるかもしれない。)

20. Don't play computer games for long hours. Your eyes might go bad.

(長時間ゲームをしないで、眼が悪くなるかもしれないでしょう。)

② 許可の丁寧用法「~してもよろしいでしょうか」

Might I~? は **May I~?** と比べると、相手の許可が得られる自信がない場面で使われる。

21. Might I ask you some questions? (質問させてもらってよろしいですか。)

22. Might I have another cup of coffee? (もう一杯コーヒーを頂戴してもよろしいでしょうか。)

23. I wonder if I might have another cup of coffee? (※22.よりも 23.の方が自然でよく使う言い方)

③ 弱い可能性の用法「(ひょっとしたら) ~かもしれない」

24. John might come here tonight. (ジョンは今晚ひょっとしたらここに来るかもしれません。)

25. It might rain in the afternoon. (ひょっとしたら午後、雨が降るかもしれません。)

Dr. Higgins's room

文法書によれば、might は may よりも可能性が弱く、不確実、ためらいがち、慎重深さなどの意味合いが含まれると説明されている場合があるが、アメリカでは may より might を好む傾向があると説明する文法書もある。

(05) must

must の中核的意味は《強制力が働いて～せざるを得ない》である。

① must は話し手の課する義務を表す。「～しなければならない」

26. **You must be here before eight tomorrow.** (あなたは明日 8 時までここにいないといけない。)

27. **You must brush your teeth after eating.** (食後には歯を磨かなければなりません。)

28. **My father must stop drinking round the town.** (父は町で飲み歩くのは止めなければならない。)

29. **I must go now, or I'll be late.** (もう行かなければなりません。さもないと遅れてしまいます。)

30. **Must I leave now? Yes, you must.** (もう行かなければなりませんか。ええ、そうしなさい。)

否定形の〈must not+原形〉は禁止を表し、「～してはいけない」と訳す。これは〈Don't + 原形〉の命令否定形で書き換えられる。

31. **You must not be late for class.** (あなたは授業に遅れてはいけません。)

= **Don't be late for class.**

32. **You must not go there alone.** (ひとりでそこへ行ってはいけません。)

= **Don't go there alone.**

Dr. Higgins's room

助動詞の must には過去形がないので、過去のことについて述べる場合には、must とほぼ同じ意味を持つ have to~ の過去形である had to~ を用いる。また、未来のことについて述べる場合には、must も可能であるが、will have to~ が使われる。

② must は話し手の論理に基づく必然性を表す。「～にちがいない」

33. **If you say so, it must be so.** (あなたがそういうのなら、きっとそうなのでしょう。)

34. **You must be hungry after your walk.** (散歩の後だから、おなか空いたでしょう。)

35. **It is six o'clock; he must be at home by now.** (6 時だ、彼はもう家にいるに違いない。)

36. **He has two foreign cars, so he must be rich.** (彼は外車を 2 台所有している。金持ちに違いない。)

Dr. Higgins's room

〈論理に基づく必然性〉とは、「(いろいろな状況から判断すると)、きっと…であろう、…であるに違いない」という意味であるが、その意味が弱められて、単なる〈推測〉の意味で用いられることもある。

(a) **You must be hungry.** (おなか空いたでしょう。)(「あなたはおなか空いたに違いない」より自然な日本語。)

(b) **You must be Miss. Bennet.** (ベネットさんでございますね。)

Dr. Higgins's room

肯定の〈論理に基づく必然性〉(「～に違いない」)の反対は、cannot~「～であるはずがない」である。

((01) の④を参照)

(a) **The news must be true.** (そのニュースは本当であるに違いない。)

(b) **The news can't be true.** (そのニュースは本当であるはずがない。)

(06) have to

主語が1人称のときは、**must** と **have to** の違いはあまり問題にならないが、習慣的行為について述べる場合には **have to** が多用されるようである。また、主語が2人称、3人称のときには、**must** が〈話し手の課す主観的な義務〉を表すのに対し、**have to** は〈周囲の事情によって課される客観的な義務〉を表す。

① **have to** は周囲の事情による義務を表す。「～しなければならない」

37. I have to swim in the pool once a week. (週に1度プールで泳ぐことにしている。)

38. You have to wear helmets at work. (作業中はヘルメットを着用しなければなりません。)

39. Muslims have to go to mosque for noon prayers on Fridays.

(イスラム教徒は金曜日にモスクに行くことになっている。)

否定形の〈do not have to + 原形〉は不必要を表し、「～する必要はない」「～しなくてよい」と訳す。これは〈need not + 原形〉で書き換えられる。

40. You don't have to hurry. Take your time. (急がなくていい。ゆっくりね。)

= **You need not hurry.**

41. You don't have to go there alone. (ひとりでそこへ行く必要はない。)

= **You need not go there alone.**

② **have to** は周囲の事実に基づく推量を表す。「きっと～だろう」この用法は、元来はアメリカ英語の語法であったが、現在ではイギリスでも用いられる。

42. You have to be joking. (冗談でしょう。)

43. The car in front of us has a wa license plate. They have to be tourists.

(前の車は「わ」ナンバーだ。きっと観光客だろう。)

(07) should

should の中核的意味は《あることが当然為されているはずなのに、いまだ為されていない。だから、～するべきである》である。**should** の用法を洩れなく挙げると10以上の項目になると思われる。ここでは、中学生が最低限知っておかなければならない2つの用法を説明するに留める。

① **should** は主語のなすべき、良心と常識に基づく義務を表す。「～するべきです」

44. You should pay taxes as a citizen. (市民として税金を払うべきです。)

45. You should see your primary care doctor. (かかりつけ医に診てもらうべきです。)

46. Should I tell her the truth? (彼女に真実を話すべきですか。)

47. You should not drive a car after taking this medication. (この薬を服用後、運転しないように。)

② **should** は主語について当然の推量(蓋然性ともいう)を表す。「当然～のはずである」

48. Our grandfather should be over ninety. (祖父は90を超えているはずです。)

49. My mother is out, but she should be back at seven. (母は外出中ですが、7時には戻るはずです。)

50. They should arrive at the Naha airport about six. (6時頃に那覇空港に着くはずだ。)

(08) had better

had better は「～した方がよい」と長年訳されてきた。このように訳されてきた理由は、この表現が仮定法に基づく表現《・・・しないよりは～した方がよい》に由来するからであろう。しかしその日本語訳のために、この英語は長年〈丁寧な助言〉を表すものと間違っ
て認識されてきている。had better を二人称主語 You と用いれば、〈脅迫的・威圧的〉な命令表現だと言われている。多くの文法書によれば、決して目上の人に使うべき表現ではなく、親が子どもに、教師が生徒に使う表現であるという。相手に助言をするのなら、had better ではなく、should を使うべきである。

51. You had better do your homework soon. (すぐに宿題をきなさい。)

52. You had better stay at home and study today. (今日は家に居て勉強きなさい。)

53. You had better remember this. (この事は覚えておけ。=思い知ったか。)

(09) would

would は will の過去時制形式であるので、もちろん will の過去形(時制の一致用法)としての用法もあるが、would の主な用法は、①仮定法の would の用法と②過去の習慣、③過去の強い意志、④丁寧用法である。

① 仮定法の would の用法「～するだろう」

54. To hear him talk, you would think he is a scientist.

(彼が話すのを聞けば、彼のことを科学者だと思うだろう。)

55. I would. (私だったらやるだろう。)

② 過去の習慣を表す用法「よく～したものです」

56. My son would often come to see me on Sundays. (息子は日曜日にはよく私に会いに来た。)

57. He would lie down at every spare moment. (彼は暇さえあれば体を休めた。)

③ 過去の強い意志を表す用法(否定形で「拒絶」を表すのが普通)「どうしても～しなかった」

58. My father wouldn't listen to me. (父は私の言うことを聞こうとしなかった。)

59. The door wouldn't shut. (戸はどうしても閉まらなかった。)

④ 丁寧用法

60. Would you help me? (私を手伝ってくださいますか。)

61. Would you mind closing the door for me? (ドアを閉めてくれませんか。)

62. Would you like some more coffee? (もう少しコーヒーをいかがですか。)

63. I would like to talk to you for a minute. (少しあなたとお話したいのですが。)

64. I would like to have a cup of tea. (お茶を一杯頂きたいのですが。)

(10) used to

used to は現在の状態と対比して《過去の長期間に渡る習慣的行為や過去の状態》を表す。

① 過去の習慣的行為を表す。「以前は～した（が今は…しない）」

65. I used to get up early in the morning. (以前は、朝早く起きていました。)

66. I used to smoke, but now I don't smoke at all.

(以前は煙草を吸っていましたが、今は全く吸いません。)

② 過去の状態を表す。「以前は～だった（が今は…でない）」

67. There used to be a lot of fish in this river. (以前は、この川にはたくさんの魚がいました。)

68. I used to like her. (以前は彼女が好きでした。)

Dr. Higgins's room

否定文、疑問文の作り方は、堅い文体では、他の助動詞と同じように、否定形は〈主語+used not to do〉、疑問形は〈Used+主語+to do~?〉であるが、口語体では、did を用いて、〈主語+didn't use to do〉、〈Did+主語+use to do~?〉のように一般動詞のように扱われる。

(a) **I used not to like her.** (以前は彼女が好きでなかった。)[堅い文体]

(b) **I didn't use to like her.** (以前は彼女が好きでなかった。)[口語体]

(c) **Used you to like her?** (以前は彼女が好きでしたか。)[堅い文体]

(d) **Did you use to like her?** (以前は彼女が好きでしたか。)[口語体]

(11) need

need の中核的意味は《物や事が欠けているために、それらを必要とする》である。need には本動詞と助動詞とがある。本動詞の need は後に名詞・動名詞・to 不定詞が続く。助動詞の need は疑問文と否定文で用いられ、過去形がない。書き言葉で助動詞の need、話し言葉で本動詞の need が用いられる傾向にあるが、アメリカでは助動詞の need が使われることは少ない。

69. You need not call me tonight. (今晚私に電話をする必要はありません。)

70. He needn't write to me. (彼が私に手紙を書く必要はない。)

71. Need I stay home today? (今日家にいる必要はありますか。)

Dr. Higgins's room

Need I~? に対する答え方として、肯定的な返答には must を用い、否定的な返答には need not を用いるのが一般的な答え方である。しかしながら、Need I~? という疑問文そのものが使われない傾向にある。Do I have to~? という疑問文を用いるのが普通である。

(a) **Need I stay home today?** (今日家に居る必要はありますか。)

— **Yes, you must.** (はい、居なければなりません。)

— **No, you need not.** (いいえ、居る必要はありません。)

<<< 参考図書 >>>

- 『英語教師の文法研究』安藤貞雄著 (1984年再版発行 大修館書店)
- 『表現のための 実践ロイヤル英文法』綿貫陽 マーク・ピーターセン共著 (2006年発行 旺文社)
- 『英文法総覧』安井稔著 (1996年改訂版発行 開拓社)
- 『英文法解説』江川泰一郎著 (1991年改訂第3版発行 金子書房)
- 『第4版 実例英文法』AJ トムソン/AV マーティネット著 江川泰一郎訳注 (1988年発行 オックスフォード大学出版局)
- 『第3版オックスフォード 実例現代英語用法辞典』Michael Swan 著 吉田正治訳 (2007年発行 研究社/オックスフォード大学出版局)
- 『英語基本動詞辞典〔普及版〕』小西友七編 (昭和60年発行 研究社)
- 『開拓社言語・文化選書 レキシカル・グラマーへの招待』佐藤芳明・田中茂範著 (2009年発行 開拓社)
- 『英文法の楽園』里中哲彦著 (2013年発行 中公新書)
- 『英文法の核心』山崎紀美子著 (1997年発行 ちくま新書)
- Meaning and the English Verb*, Leech, G.N. (2004³ Longman)